

---

# これは罪ですか？

零月零日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これは罪ですか？

### 【著者名】

N4127Q

### 【作者名】

零月零日

### 【あらすじ】

取り柄が無病息災の少年レイスは、現代で罪を犯して、HPとMPが存在する『RPG』のような異世界で目覚める。

序章  
1

気がつけば、俺は処刑台に立っていた。

大勢の人だかりが柵の代わりをし、この処刑台を囲つてゐる。

群衆は田の前で繰り広げられる慘劇を心待ちにしている。レンガ造りの町並みが云がり、俺の心を惑わせる。

それは、罪に対する罰。

一人の傲慢な少女。己の身分にご満悦、下賤な民を蔑み見下した。

「  
跪け  
」

「……はい、ご主人様」

俺の一聲で全ては反転する。誰も俺に逆らう事は出来ない。例えどんなお嬢様であろうと、俺が命令すれば靴でも舐める。わあ、その高貴な体で奉仕してもらおう。

一人の強欲な男。望むもの全てを手に入れるため、悪徳商売に身を染める。

だが。

「俺はお前の死が欲しい。金ならいくらでも出そう。さあ見せてくれ、最強最悪の殺し屋さん。お前は、金さえ積めば殺せぬ相手は居ないのだろう?」

「……わかりました」

彼が買ったのは、恨みだ。金なんて実質的価値の無い物に死ぬまで踊らされる。俺に望んで手に入らない物は、無い。物は、無い。俺が欲しいのは……人だ。

一人の暴食な料理人。料理も皿も人も何もかもを食らいつくし、その味に酔いしれる。

だが。

「何もかもを食べ尽くしたという貴様の味は、さぞ格別なのだろうな。召しやがれ」

「……頂きます」

最後の晚餐は、彼自身。ビクビクと体を打ち震わせながら、その体にナイフとフォークを突き刺して、喉を通していく。俺も一口もらおうか。

一人の扇情的な少年。見る者を魅了する美貌を持ち、愛とかけ離れた愛情を見せる。

魅せられた少女の一人。そこには愛しかなく、その想いは重く、嫉妬は深い。

だから。

「ほら、愛しの彼が取れるぞ？ 大丈夫、彼は君を愛している。何をやつても許してくれるさ」

「いやああああああああ……」「ぐあ

たつた一言に魅せられて、少女達は殺し合つた。少年には歪んでも愛はあり、その結果、全ての中心で愛の花を咲かせた。人を魅せるのは、容姿だけではない。

一人の怠惰な少年。のんびりまつたり暮らし、我関せずと行動をしない。

だが。

「どうした？ 逃げないのか？」

「……面倒だ」

不抜けた精神から脱する事は無く、迫る危機から逃げもせず、怠惰の人生を貫いた。気を抜く事は大事でも、それが戻つてこなければ身を滅ぼす。

そして……。

一人の憤怒を孕んだ少年。全てに怒りを抱き、全てに怒りを向ける。

だが……。

甲冑が握る輝く銀色は、日に照らされ鋭く光り、どんな罪も断罪してくれそうだ。

脳内を駆け巡るように知識と記憶がインフレを起こす。

異なった常識が俺の頭を抉るように痛み付ける。

殺人？ 奴隸？ 運命からの逃避行？ 自由？

運命に縛られた生き方、何もかもを許された存在、擬似的神様。宗教裁判、弾圧される人。

自由に生きる事は、罪なのか？

そして、剣が振り下ろされた。

## 序章1（後書き）

スランプでの景気付け作品です。  
すこし気まぐれで書いてます。

## 序章2

振り下ろされる剣。振り下ろした剣。

一つの剣が不協和音を広場に響かせた。耳障りな声で聴衆がざわめく。

「なつ！ 貴様何をする！」「……ッ！？」

甲冑ともう一人が驚きを見せるが、俺は何も言わない。

俺が振り下ろした剣は、甲冑が振り下ろした剣を受け止め、受刑者の少女を助けた。甲冑の剣を弾き上げ、返しで少女の両手を縛り付けていた鎖を断ち切る。

「え、え……？」

驚き碌に喋れもしない少女を立たせ、俺は周囲を見渡す。瞬間、気持ち悪くなる程の人だかりに、申し合わせたように一力所だけ道が出来る。そこでは、短い金髪の少年が手を振っていた。

「行くぞ」

「えつ？」

俺は少女を抱きかかえ、処刑台から飛び降りる。そして、不意に出来上がったその道を駆ける。俺自身の格好も甲冑だが不思議と重くは感じず、むしろ普段より軽快に動いた。

「止める！ 奴を止めるんだ！」

背後から先ほどの甲冑の声が聞こえたが、無視する。視界の端で

何人か同じような甲冑が動くのが見えたが、それも気に留めずとにかくこの道を走り抜ける事に専念する。

「いじりだ！」

道の終わりで、金髪の少年が正門へと向かっていた。疑いもせずそれに従つて、俺も正門へと向かつ。

「サンダー！」

背後から呪文を唱える声、その声が幾重も重なつて重厚な物となる。空気が震えるのを感じ、そして雷鳴が轟いた。

背後が燐然と光りに溢れ、ズダン！と衝撃が加わる。甲冑に酷い衝撃を受け一瞬体がぐらついたが、止まる事無くすぐに体勢を整え走り続けた。

その姿を見てなのか、背後で大きなどよめきが起こっていた。

「止まれえええええ！」

正門では見張りの番兵達が、先行していた少年と剣を交え、すぐに吹っ飛ばされた。どうやらあの少年はなかなか強いらしい。

「このまま行くぞ！」

そう言つて少年は、あろう事か、城壁を飛び越えた。少年の体は城壁を超えて俺の視界からフェードアウト、外に着地したように思われる。

は？

いやいや、さすがにそれは無理でしょ。俺、結構身軽に動けるけど、甲冑着てるんだよ？

足を止めてこそいなかつたが、そんな事を考えているうちに、背後から大勢の足音が近づいて来ていた。

ええい！ くそ！ じつなつたらやけだ！

「アイキヤンフライ！」

俺の体が宙を舞い、そして……。

俺は屋上から飛び降りていた。

飛び降りるしか、無かつたから。

屋上には三人の人影があり、今になつては一人しか居ない。  
三人の一人だった俺は、もう屋上に居ない。空中に居るのだから。  
屋上に居る一人が涙目で、もう一人は笑っていた。  
それが、俺が見た最後の光景。

思えば、いやな予感と言ひ物はひしひしと感じていた。

授業中に見た縁起でもない夢。

なんだつて処刑する側に立つていなければならぬんだか。魔法とか英語でどことなく緊迫感に欠けていたし。

その前の登校時に見つけた呼び出しの手紙。

今時下駄箱に入つた手紙に淡い期待を抱くのは間違いだ。それは間違いなく、不幸の手紙だ。靴なんかと大事な手紙を同居させようなどと愛しむ人は思わないだろう。悪戯だと思うのが普通、本気の手紙が異常。勿論、俺は後者だつた訳だが。

去年から悪の道に走り始めた親友と、急に色気づいた幼なじみ。酒タバコ無免許運転カツアゲ薬売買、それらを笑顔で生業とする親友。

化粧をしたり服の露出が増え、異性として意識し始めた幼なじみのお嬢様。下駄箱に手紙が何通も入れられ（その時に彼女が言つていた言葉を先ほど拝借した）、屋上や後者裏に何度も呼び出され、その度にフリまくる程の美少女だった。

不覚にもその美少女な幼なじみと一緒に居る所を親友に目撃され、最悪な展開を迎えた。

親友が幼なじみにちよつかいをかけ、撃沈したのだ。

悪に染まつていた親友は、更正する事を知らず、非道に出ようとした。仲間数人を誘つて幼なじみを襲う計画を立てていたのだ。そこを俺がその仲間だけをボコボコにしたもんだから、話がいよいよ詰まらなくなつたのだ。

その事件で俺と親友の間には亀裂が生じ、本日放課後、屋上に呼び出されたのだ。ちなみに、ここで勘違いしては行けないのは、溝ではなく、亀裂だった事だ。

屋上で俺達は法律で禁止された決闘を演じた。拳と拳の熱い戦い……ではなく、拳と刃物の片側デスマッチだったのは、生じたのが亀裂で、親友が悪に落ちていた所為だろう。

結果、親友は俺にかすり傷一つ負わせる事も出来ず、無様に屋上に転がつた。

そしてエピローグ、幼なじみがどういう訳か屋上に登場。親友は彼女に刃物を突きつけ人質を取ることに成功、俺に屋上から飛び降りを要求したのだ。

人質にナイフを突きつけた以上、親友には俺を攻撃する手段は無いのだ。必然的に、その要求は生まれたのだろう。四階建ての校舎の屋上から、飛び降りると。

それは、一種の死刑宣告。

俺には決定権があった。  
彼女を見捨てて親友をぶん殴ると、彼女を見捨てて飛び降りるのと。  
どちらを選んでも、俺も幼なじみも傷つくのだ。

片方は体、もう片方は心。

飴と鞭じゃない、鞭と労働だ。

そして俺は、飛び降りた。

結局、傷つくるのは幼なじみの心だけだ。俺自身は死んで樂になるのだから。

だから、俺は問うた。

自分が苦しまないために飛び降りた、俺の行為は……。

これは罪ですか？

### 序章 3

俺に自慢出来る事と言えば、無病息災なことだけだらう。息災の方は怪しいが、俺は今まで一度だって怪我や病気をした事は無い。

今まで一度も自分の血を見た事が無いといえば、その凄さは解るのではないだろうか。

ボコボコにする事は多いが、喧嘩が強い訳じゃない。ただ単純に、生存本能が強いだけだと思う。

相手を攻撃するのではなく、攻撃を避ける事に重点を置いて戦う。肉を切らせて骨を断つ、なんて戦法は絶対にしない。とにかく、自分の健康第一だ。相手が『殺る気』満々の奴ばかりなので、手加減せずにぶん殴っている。

複数人を相手取らなければならぬ時は、勿論、不意打ちで数を減らす。卑怯で結構。

で、そこまで生存本能のある俺が、飛び降り。

人生初の怪我は、致命傷、ってなんかすごく……。

「……………丈、…………」

どこか遠くから声が聞こえた、気がした。

(…………氣のせいだ。まだ俺は三途の川を見てない。これは…………幻聴

(だ)

俺は自分の体に嘘をつき、動くつともしなかつた。

「……もし、…丈夫……」

しかし声は次第に明確に聽こえるようになる。だが俺は、

(幻聴だ。俺はまだ三途の川を見ていない。俺は、屋上から??)

自分の体に嘘をついて永眠しようとしてみる睡眠欲に忠実な俺。と、それを邪魔するように、体が揺り動かされるのがはっきりと感じられた。

(あれ? 何これ? これって、もしかして??)

そして、俺の脳裏に浮かび上がつて来た考えを後押しするように。

「……もしもし、あの、大丈夫ですか?」

声が、はっきりと聞こえた。

それは、聞いた事がない声。最低でも俺の知っている人物の声では無かった。しかし心配しているのがはっきりと分かる声調。

どうやら、俺が死んでいない事は確定したようだった。観念したよつこ、重たい瞼をゆっくりと開く。

夜だった。

夜空が広がっている。しかしその空はいつもと何か違っている。衛星が見えそれは月のように白いが、月より綺麗だ。夜空に瞬く星

が近く、そして鮮やかに見える。ああそうか、山みたいに空気が澄んでいて夜空がよく見えるのか。  
そして、少女の顔が田に入った。

美少女だった。

透き通るような長い銀髪、深い藍色の瞳、端正な顔立ち。  
そして、夢で見た少女と良く似ていた。『気がした。生憎見た夢は忘れやすい。』

少女と、一瞬目が合った。

ゆっくつと起き上がり、少女はほとと溜息を吐いた。

「…………君は…………？」

俺は頭を擦り起き上がる。そして、気がついた。

（怪我が？？無い？…………死後の世界、なのか？）

屋上から飛び降りたと言つのこ、怪我が無いのだ。痛みも感じない。

「…………あの、大丈夫？ 怪我とか、無い？」

ああ大丈夫だ、と返事をすると、少女は心底安心したようにべたりと座り込んだ。

「…………」

俺は静かに驚いていた。初対面で失礼だと思い、声を上げては驚かなかつた。元々あまり感情を表に出さないこともあつたが。

少女の服装は、さながらRPGに出てくるような黒を基調としたローブだった。

一の腕や太腿の部分に大きな露出があり、少女の奇麗な白い肌が惜しげも無く晒されている。

少女の手には、ながらRPGに出てくるような、武器としての機能を持った装飾が施された杖があった。

長刀と杖を合わせたような、それでいて気品を漂わせる一品。

少女の髪や瞳は、まぎれも無く自然のモノだった。  
髪は染めたモノではないと一目でわかる艶やかさと輝きを放つて  
いる。

だけど、それよりも、それら全てを差し置いて、俺が一番衝撃を受けたのは。

異様な胸の動悸、だった。

だから、俺は柄にもなくテンパって。

「君は、死後の世界？」

なんて尋ねてしまつたのだ。

「…………」

一瞬、世界の全ての動きが止まつたような沈黙が流れた。  
そして。

「……あなた、本当に大丈夫？」

若干引をついた笑みを浮かべる少女を見て、俺は思った。

(生きてるなら、どうでもいいか。異世界ってのは解ったし)

それなら、と俺は思い切ってみた。

「……こや、ビリヤリ記憶喪失、みたいなんだ」

と、少女の顔が青ざめる。

「あっ、別に記憶というか、知識が無いだけだから。……もしかして、俺と知り合いだったのか？ 初対面の気がしないんだけど」

夢で見た少女と似ている、などと言つたら電波と思われるかもしないので（この世界に電波があるとは思えないが）、そこは口にしなかった。

「……あっ、いえ、違うわ。たまたま通り掛かつたら、あなたが倒れていたから。……えっと、で、その、なんて言えば良いのかしら」

と、少女は不自然に視線を泳がせる。ほのかに頬を染めている。そして、言ひづらそうに、目を逸らしながら言つた。

「……追いかけて遭つた見たいなのよね、鳥ぐるみ剥がされていた

「わ  
「……あっ」

そして俺は気がついた。自分がマントで体を包まれただけの状態だと。  
なるほど、少女の視線が定まらない訳だ。

そして、自分の胸の動機が酷く悲しく思えて來た。  
俺は露出癖もあるのかよ……。

「……とつあえず、怪我が無いのなら何よりだわ。……私はこれから街に行くけど、あなたはどうするの？」

そう言われてもな、と首を傾げる。

（「」がどういった世界なのか分からないし、何より俺はどうしたいんだ？ 死ぬ？ のはもう「」めんだな。元の世界に戻る？ ……いや、なるようになるか）

周りを見渡して見る。

周囲は夜だと言うのに、蛍光灯程の明かりを放つ花によって照らされていた。海岸線に近いのか、塩の匂いの乗った風が微かに吹いている。空気は澄んでいるが、いつもと何か違う。

完全に地球と法則が違う事が分かった。

とりあえず、少女が去る前にどんな世界なのか聞いておこう。少女心配そうに見る少女だったが、しかし丁寧に教えてくれた。

「？？魔法と科学が混在する世界、ね。……ありがとう、なんとか思い出せて来たよ」

薄い布地のマントだけで地面に座っていた俺は、いい加減に痛くなつたので立ち上がりとして、

「？？待って」

と、少女に肩を掴まれて再び座らせられた。少女は人差し指を口に添え、静かにするようにジエスチャーした。しかし俺は肩を掴むた

めに急接近した少女に驚いて、口も動いていなかつた。

少女の視線の先には茂みがあり、そこが微かに動くのが俺にも解つた。

そして、

イノシシを太らせたような生き物が飛び出して來た。

(わあ、テンプレートな展開だな)

そんな事を思つてゐる俺だが、しかし、一つだけ問題が合つた。  
俺の格好は裸にマント。露出に気をつけねば走りづらい。俺一人  
なら氣にも止めないが、隣には美少女がいる。恥ずかしい。  
しかし……靴だけ残つていて、本当に露出狂にしか思えない格好  
だつた。

戦おうにも俺に武器は無い。木の棒も都合良く落ちてない。手の  
爪は……役に立ちそつも無い。都合良く伸びたりはしないだろうし、  
伸びてほしくはない。

都合良く脚力などが変わつてゐるかと淡い期待を抱いたが、どう  
やら無理みたいだ。俺の足は生まれたての子馬のように震えている。  
あれ？ これつて脚力以前の問題じゃね？  
と。

「サンダー」

の声と共に稻光が隣で見えた。見れば、少女の手に持つていた杖  
から雷が出ているではないか。

ビューティホオー。これで電球要らずだね！

……違うな、なんか違う。感動が無い。

あつ、そつか。俺、これ夢でもちよつと見てゐる。それを背中で喰  
らつてゐる。

正夢、既視感、デジャヴの三単語が渦巻いている。だが、それもここまでだった。

少女の放った雷撃が直撃したイノシシは、黒じげになつて崩れ落ちると、ほのかに光る何かが浮かび上がり、空へと消えて行つた。そして、それと同時にイノシシの体がわずかな肉を残して砂のような物質へと変化した。

成仏、した？

「……本当に色々と覚えてないのね」

どうやら俺は驚きを顔に出していたようだ。  
何が面白いのかくすくす笑う少女は、それでも説明してくれた。

「いい？ 生き物が死ねば、そのコアが放出されてその生き物を構成していた要素に分解するわ。分解されずに残つた物は、食材や武器の材料として使えるの。あと、砂みたいな物質……アッシュに鉱物みたいな物が含まれている事があるわ。それを貨幣として扱つているのよ。アッシュは時間が経てば風に流されて星の中央に流されて行くわ。どう、思い出せた？」

ええっと、要するに、RPGみたいに倒したモンスターは消失というか分解するけど、ちょっと残つて、それらが材料や食料になる。それでその分解された状態、アッシュの中に、お金が含まれていると。

なんと言つたか、RPGの戦闘後をなるべく理解出来るようにした、そんな感じがするな。

それにコアだのアッシュだの専門用語が使われている訳かな。  
まあ、倒せば金や道具になる、とだけ覚えておけば良いだろ？

今の所。

「ああ、親切にありがと。俺一人だったら、勝てなかつたと思つ。命まで助けてもらつた。本当に感謝する」

多少大げさだが、それでも真実に近い事だ。

俺の今の装備<sup>マント</sup>では逃げる事しか出来なかつただろう。

「そんな事無いわ。有る意味私の所為でもあるし……」「は？」

「何でも無いわ。……っと、といひで、自己紹介がまだだつたわね

そう言つて、少女は焦つたように、慌てたように、誤摩化すように髪を整え、そして小さく笑みを浮かべて手を差し出した。

「私の名前はリアよ、えつと……」

「カレーライス。俺はカレーライスが好きなんだ」「え？」

あれ？ 僕なんか変な事言つた？

リアの笑顔が可愛くつて、ちょっと放心してたのは内緒。な、名前ね。えつと、記憶喪失だから思い出せないふりしても良いんだよな。

あ～、でもそれはそれで迷惑かも。じゃ～。

「思いついた……じゃなくて思い出した。……ライス。俺はライスだ」

カレーライス レイス。

安直言つな。

「これも何かの縁よね、よろしく、レイス」

「ああ。こちらこそよろしく、リア」

これが、俺とリア、二人の大罪人の出会いだった。

## 序章3（後書き）

今回の作品のコンセプトは、『すみじ』RPG。

## 第一話

レイスとリアの二人は山を下り、近くの農村へと訪れた。二メートル程の壁と掘りで囲まれた村で、クッチャンというその村の名を聞いたとき、レイスが微かに反応したのにリアは気付いていた。

「ここがクッチャン村。ジャガイモが特産の農村よ」

「…………」

「何？ もしかして、何か思い出せそう？ 実はこの村の人？」

「……いや、そうじゃない……と思つ。何でも無いよ」

「そう？ ジゃあ、とりあえず服だけはどうにかしないとね」

クッチャン村は、木造の建物が十数軒程あるだけの小さな村で、村の大半を畠が占めていた。その中で、二つの住居を合わせたような少し大きめの建物が、いわゆる武具防具店だった。

店内にはレジに座つてパイプを吹かしているおじさんしかいない。しかし武具や防具は充実しており、様々な物が取り揃えられていた。

「じゃあ、武器と防具、好きな物を買ってあげるから、選んで良いわよ」

「…………いいのか？」

リアは適当に店内を見回しながら、レイスに告げた。対してレイスは、知り合つたばかりの少女に物を買ってもらつなど悪い、と思っていた。

「いいのよ。これも何かの縁よ。……それに、半分は私の所為だし」

「何か言つたか？」

「何んでもないわ。ほら、レディーをあまり待たせないの」

リアに急かされ、レイスはリアの不穏な台詞を言及する事は無く、武器と防具を選び始めた。ちなみに、このときレイスの脳内では『ただより高い物は無い』という言葉が渦巻いていた。

両刃剣、刀、ナイフ、斧、槍、杖がだいたい一種類ずつあったが、レイスはただの学生だつたため、それらのどれも使った経験は無かつた。悩んだ末、学校の授業で剣道の経験が有る事から、刀身が七十センチ程の刀を選択した。

防具に関しては、リアの着ているようなローブ、自分が今羽織っているようなマント、皮や金属の鎧などがあった。鎧なんかを着ても動けないだろ?と考え、布の服の隣にあつた生地が厚めの服を選択。

両方合わせて780マネーという、よく解らない金額だったが、リアは特に驚きもせずに購入。部屋の隅の更衣室でレイスは着替え、見た感じこの世界の人、といった容姿になった。

「本当に、何から何までありがとうな、リア」  
「どういたしまして。じゃあ、宿屋を探しましょう。一晩眠れば何か思い出すかもしれないし」  
「……そうだな」

本当は記憶喪失ではないといつ告げようか、レイスは結構本気で悩んでいた。

宿屋は二階建てで、村の中で一番大きな建物だった。  
遅くなれば部屋が一杯などということもあるので早めの予約をして行く二人。幸い、一杯ではなかつた。

「新婚旅行ですかい、お二人さん?」

「ち、違います！」  
「ああ、俺と彼女はそんな親しい関係じゃないんだ」

「なんだい、そうなのか？」

「生憎一部屋しか空いてないんだ。悪いねえ」

なぜか残念そうにそう言つ宿屋の主人。そして、

と言われ、二人はやつと意味を理解した。

「……」「……」「……」「……」

案内されたのは、なかなかの質の部屋だった。一階にある部屋で  
大き目の窓からは煙が見える。備え付けのお風呂もある。ただ、備  
え付けのダブルベットが一つ居座つている部屋だった。それ以外に  
寝られる場所は無い。無駄にスペースを取るダブルベット。そして、  
部屋には二人の若い男女。

ちなみに、料金は100マネー。

「……じゃ、お一人さん。楽しい夜を」

そう言い残して去つていく宿屋の主人。

「……」

リアは沈黙。さすがに知り合つたばかりの男と一緒に部屋で寝ようとは思わなかつたようだ。

対してレイスは、部屋には入らずにそいつを宿屋の入り口に向かう。

「あれ、どこに行くの？」

「いや、ちょっと散策でもしようと思つて。……ほら、何か思い出せるかもしれないから（巫山戯るな！）」（どう考へても居心地最悪だろ、この状況。俺は自分の部屋に戻るぞ！…………つて、部屋はもう無いのか）

「そう？　じゃあ私も行くわ（こんな部屋に一人残されて何をしてろつて言ひのよ）」

そう言つて、部屋だけとつて二人は宿屋を後にした。

特産品が食料であるためか、村の中央の広場では様々な種類の食材が並んでいた。野菜が多めであるが肉や卵、少ないが魚介類も数種並んでいた。

「へえ……、こんな山中の村でも魚介類が手に入るのか。並んでいる物だけしか無いのか？」

「違うわ。時空間魔法の応用よ。時間という概念の無い異空間に食材を詰めて、腐る事を防止しているのよ。商品を見せるために並べているけど、実際は異空間にたくさんあるはず。村全体に行き渡る程あると思うわ。何？　お魚好きなの？」

「いや、別に。俺が好きなのはカレーライスだ」

小首を傾げてレイスの目を覗き込むリア。宝石のようになじみの蒼い目が、じっとレイスを見つめた。

レイスは顔には出してこないが、めぢやくめぢやく動搖していた

りする。

その証拠に、あるかどうかも解らないカレーライスの宣伝をしていた。

と、村の広場の方が騒がしくなった。

「行つてみよ!」

レイスは駆け足で騒ぎのした方へ向かつた。

「……どうしよう、行つた方が、いいのかしら」

リアは迷つた末、歩いてその方に移動した。

広場には人だかりができていた。何かを遠くから囲むようにしている。ただところどころ穴があり、レイスはすぐに状況を理解できた。

小さな女の子が、数人の男に絡まっていた。腰にナイフ。山賊のようだつた。

女の子の足元には水の入つていないバケツ。そして男の足元には水溜り。そして服からは水滴がぽたぽた。

「い、ごめんなさい」

「やい、ガキ！ 謝つて済むと思つてんのかー？ それなら軍隊は必要ないつての」

「兄貴の服は高いんだぞ！」

「弁償しろ！」

「ひつ！」

どうやら女の子が誤つて男に水をかけてしまつたようだつた。レイスは自分の鼓動が早くなつてゐるのが解つた。

(昔からそういうなんだ。」「へ、理不尽なやり取りを見ると、ムカムカするんだよ。結局、一番理不尽なのは第三者である自分だって言うのに）

「あれは……」「」辺を縄張りにしている山賊ね。関わらない方が？」

「？」ちょっと助けてくれる」

レイスが駆け出したのと、リアが逃げるように遠のけたのは同時だった。

そして、

「俺たちに逆らう気があるか思い知らせてやるー。」

男の拳が女の子に向かつ。

レイスは、自分の体がやけに早く動くの感じた。

「やめろよ、いい大人がみつともない」

そして、男の拳をレイスは止めた。アドレナリンが作用しているのか、男の拳をいとも簡単に止める事が出来た。拳を弾き、レイスは言つ。

「ただの水だろ？ 乾かせばどうにでもなる」

「あ？ てめえには関係ないだろ？ 邪魔するのか！ 殺すぞ！」

と、男はナイフに手をかける。

それに合わせたように、レイスも先ほど手に入れた刀に手を添える。

「言つておくが、俺は容赦はしない。獲物を見てよく考えてからそういうことは言つんだな」

「意味わからねえよ！ 死ね！」

男はレイスの警告を無視し、ナイフでレイスを斬りつける。

刹那、鈍い音共に何かが切り裂かれた。

「つっ！」

そう声にならない音を出したのは、山賊だった。

男の持っていたのは、ナイフだった物だった。ナイフは、柄から先が無かつた。そして、その刃は山賊達の足下に突き刺さっている。

「な、て、てめえ！ 覚えとけ！」

そう言つて山賊は退散していった。見事な逃げっぷりだった。騒動を見ていた村人達が安堵の溜め息をつき、チリジリとなる。

「大丈夫か？」

レイスはそう女の子に聞く。

十二、三歳の年頃の女の子で、幼さの残つている顔立ちだ。

「あ、ありがとうございます」

女の子はそう言つて立ち上がり、お辞儀をしてバケツを持って走り去つて行った。

レイスはほつと溜息をついた。

(危ない危ない。いつもの癖でつい出ちまつたが、俺こそ相手を良く見て行動しなくちゃ駄目だな。今回はたまたま体が動いたが、そう何度も上手く行くとは思えないし。刀が逆に折れる事だってあつただろうしな。気をつけないと)

そして、ジト目で自分を睨むように見ているリアに気付くのだった。

「ねえ、どうして助けてあげたの？」

人だかりが消え、広場にはレイス以外に一、三人ほどしか居なくなつたところで、リアが不思議そうにレイスに尋ねた。レイスが間に入っているときは、人だかりから離れて見ていたのだった。

「どうしてつて、当然じゃないのか？ 困っている人を見たら助けるだろ？」

そういうつたレイスに、リアは呆れたような、驚いたような、嬉しそうな、もの凄く表現しにくい表情を浮かべた。その表情を見て、レイスは気付いた。

「もしかして……当然じゃない、のか？」

「もしかして、本当に何も覚えてないの？」

大きく頷くレイスを見て、リアは項垂れた。

## 第一話

リアはレイスを宿屋に連れ込み（決して性的な意味は無い）、説教を開始した。

「レイス！ あなた記憶喪失なんでしょう？ それなら危ない事はないの！ 最低でも、HPくらいは発動して！ 見てるこっちがハラハラする！」

「……え、HP？」

顔を真っ赤にして怒るリアは子供っぽくて可愛いな、とか考えていたレイスは、ある種聞き慣れた、しかし現実には聞いた事の無い単語に狼狽する。

「アハ、HP。ヒットポイントの略。それも覚えてない？ ってことは、MPとかステータスも？」

「……えっと、マジックポイントに戦闘力を数値化したやつの事か？」

「思い出した？」

「いや。パッと頭に浮かんだんだ。でも、それがどう戦闘に役立つかは解らない」

「深く読み取れば、一から説明してくださいお願ひします、というレイスの発言に呆れながら、リアは説明を始めた。

「HPっていうのは、神様の加護よ。食事したり寝る時にお祈りするでしょ？ それでHPを授けてもらってるの。HPは、戦闘中に身を包むように展開して、怪我から身を守ってくれるわ。だから、怪我をしたくなかったらHPを発動させなさい、って言つてるので

「……どうやって?」「

「鬪気を出す感じ。やる気、とも言ひ」

「……感覚的なんだな。でも、HPについては解つた」

じゃあ続けるわよ、と教師が指差し棒を振るみたいに杖を振りながらリアは言った。

「MPっていうのは、マジックポイント。自分の持つ魔力を数値化したものね。魔法は、MPを消費するわ。自分の魔力を空気中や地中に眠るマナに放つて、目覚めたマナをその放った魔力で制御するの。だから大規模な魔法になればなるほど、MPの消費が激しくなる訳」

「MPが無くなったらどうなるんだ?」

「魔法が使えなくなるだけよ。肉体を構成するのに必要な魔力は、MPに含まれていないから」

「じゃあ、MPが0になつても魔法は使えるのか?」

「一応、ね。そんな事すれば、体が分解して死んじゃうけど。『利用は計画的に、つて言われてるわ』

「どこの消費者金融だよ、とレイスは心の中で突っ込みを入れた。

「で、ステータスなんだけど、これは攻撃力、防御力、素早さ、精神力、運を数値化しているわ。でもこれは普通解らないからいいわね」

「ん? 気軽に見れる物じゃないのか?」

RPGのHPやMPと同じだと思っていたレイス。スタート画面を開けば簡単に見れるのではないのか、などと思っていた。

「まさか。そういうスキルを持った人じゃなければ、見る事は出来

ないわ。戦闘力程度なら武術に秀でた人でも解るけど、運や精神は解らないでしょ。……ねえ、レイス」

リアは品定めでもするようにレイスを見た。レイスは俯きその視線から逃れ、そして？？。

「……リア。実は、俺は記憶喪失じゃないんだ」「それはなんとなく気付いた」「えっ？」

レイスは驚いたようにリアを見つめるが、実際は知られている気がしていた。だからこそ、レイスは話す事にしたのだ。騙しているようで悪い、と。  
自分にここまで親切にしてくれるリアが、自分を裏切る事は無いと、信じ込んで。

「そうか……。嘘付いて御免な。実は、俺……」

そしてレイスは語った。

屋上から飛び降り、気がつけばあの森に居た事。異世界だが地名が元の世界と酷似している事。魔法やコア、魔物は存在しない事。『RPG』という架空世界でHPやMPなどは知っている事。  
レイスとしては、あまり語れる事は無かつた。だが、リアは目を輝かせてその話を聞き、全てを聞き終えて少し呆然としていた。

「信じられないかもしだいが、本当の事なんだ」

レイスの自信なさげな台詞に、けれどリアは頭を振った。

「……大丈夫。信じるわ。それで、色々納得出来るから。うん」

リアは大きく頷き、そしてレイスを見て言った。

「待っていたわ、変革者。この星はあなたが来るのを待っていたのよ」

「え？」

突然のその発言には、レイスも驚きを隠しきれなかつた。  
これはまるで、勇者や魔王になるフラグではないか、と。  
それでも、勇者や魔王になるのは、目的も無く生きていこうとしていたレイスに取つて、有る意味目的を与えてくれたのだから、良い事ではあつたのだが。  
それで終わりはしなかつた。

「ごめんね。私が出来たからここでお別れ。あんな事言つたけど、特に何もしなくていいのよ。好きに生きていいかり。さよなら、……またね」

そう言つてリアは部屋を飛び出して行つた。

取り残され、何もかもを失つたようなレイス。  
あまりの急展開に、なにも反応出来ていなかつた。

## 第一話（後書き）

感想・指摘をお待ちしております。

リアが出て行つた宿屋で、レイスは一人寂しく食事を摂つていた。思えば半日ともにした程度の関係でしかなかつたな、とレイスは苦笑を浮かべた。

昨日（？）の夜にこの世界で目覚め、それからはずつと一人で行動して来た。たつた半日だと云つのに、レイスはリアを信じて異世界から来た事を話し、結果は……。

「辛氣くさい回想はやめだ。生きていれば、また会えるぞ」

そう小さく呟き、レイスは食事の手を進めた。

食事を終えて、思つた異常に寝心地の良いダブルベッドに寝転びながら（ダブルベッドと云つのが孤独感に拍車をかけていたりいかつたり）、レイスは集中し、HPを発動させようとしていた。リアの話によれば、食事前にお祈りをすればHPが得られるという話だつたのだが……。

HPらしきものは全く身に付かなかつた。

「……やつぱり無理か。信仰心が無いからかな、その神様つて奴の。まあ、今までだつて怪我しないように戦つてたんだ。武器が凶器に変わつただけで、戦い方自体に変化は無い。手加減せずにやれるようになつた、といつだけで十分だな」

HPはさつそく諦めるレイス。諦めが肝心だ。

「さて……これからどうするかな。生きしていく事が第一にしつ、それでどうする？ 元の世界に戻る方法を探す……と言つても、戻れるのか？ 戻つたら死体でした、みたいな展開も無きにし非ず。こ

の世界で生きるって言つても、俺はコアって重要単語を聞きそびれてしまつた。何故人を助けるのが当然じゃないのかも。……問題は山積みだな

とりあえず、宿に泊まるだけのお金を稼がなきゃならない、明日は山でモンスター退治でもするとしよう。

レイスはそんな事を考えながら、一人用のベッドにも関わらず、貧乏生活故にリスのように丸まって就寝した。

「はっ！」

突つ込んで来たボアーという名のイノシシもどきを一閃し、レイスは刀を鞘にしまった。もしもRPG補正（コアの影響で死体が消失する現象の事を勝手にそう呼んでいる）が無ければ、レイスの周りは血塗でイノシシの死体が大量に散乱していただろう。といつても、少しはあるがボアーの肉も残っていたが。HPがゼロになつた後に切ると血が吹き出て、少し返り血を浴びていたが、レイスは全く無傷であつた。

リアは呪文一つで倒していくので解らなかつたが、どうやらモンスターもHPを持つてゐるようであつた。切り掛かると触れた瞬間、刀に込めていた力が吸い取られるような感覚がある。それが神様の加護の力であろう、とレイスは思つていた。

「だいたいこれで1000マネーか。ボアー1体辺りが50マネーを落とすから、合計20体倒したのか。経験値なんてものがあれば、レベルアップ物だよな」

アッシュの中から銅貨を思われるお金を取りて、村を出る時に昨日助けた子供にもらった道具袋に入れて行くレイス。そして。

「まあ、正直そんな事はどうでもいいんだ。俺が心配しているのは、ここが一体どこかという話なんだよな……」

迷子のレイスは途方に暮れていた。

リアと出会った山に入ったのは良かつたが、ボアーリとの戦闘に夢中になつて道に迷っていた。辺りはなんの変哲も無い木。目印となるような物も一切無い。

「やばいな。遭難した……？」

声や表情に動搖は見られないが、手が自然と震え出していた。朝食から何も食べておらず、空腹。体は疲れを見せないが、お腹が減つたのは感じていた。

「俺……このままこの森で死ぬのか？」

ふらふらと道でも無く歩くレイス。遭難したら下手に動かず助けを待つ、という行動原則を知らない訳ではないが、そもそも助けが来る道での無い場合は無意味であると判断していた。

「はははは、そっか。やっぱり俺は罪人か。贖罪のチャンスなんて、『えられないのか……』

濁つた目つきで若干ネガティヴモードに入つて來ていたレイスだ

つたが、ふと耳を澄ませれば、人の声が聞こえて来る。田に輝きを戻し、レイスは駆け出した。

そして、人の姿を捉え、レイスは言った。

「すまない、ちょっと道を伺いたいんだ？？が……」

「…？」「…………」「…………」「…………」「…………」

最悪のタイミングだった。

レイスを見てリアの顔が驚愕を表し、この状況を見てレイスの顔が露骨に引きつり、二人の表情を見たりアを囮んでいる三人の男達の顔は露骨にいやらしく歪んだ。

男達、それは昨日村の子供に喧嘩をふっかけていた、山賊だった。

そして、山賊達は完全装備で目には復讐の炎が宿っていた。

リアとの再会を喜びたいレイスだったが、さすがにそんな素振りも見せられなかつた。

「ははは、なんだ兄ちゃん、道教えてほしい？ それなら？？」

山賊たちがレイスに歩み寄つた。一瞬だが、山賊の視線がレイスに集中する。

レイスが男に迫られる趣味は無い、と一步引く。  
それを見て、リアは杖を振り上げた。

(「(+)しか無い！」)

「サンダー！」

リアの叫んだ魔法名に答えるように、杖の先に光瞬く粒子が集ま

るのを一瞬だが、レイスは感じた。そして、

「……え？」

「なっ！？」「んなー！？」「仲間じゃないのかよー！？」

「『じめんね？』

躊躇無くレイスと山賊に向けてそれを放った。

杖の先からジグザグに雷光が放たれ、山賊たちに直撃した。山賊たち、残念ながらレイスもそれに含まれていた。

ぶすぶすと、何かが焦げる音と共に、ざわつ、といづ音が三つ聞こえた。

「これからは相手を選ぶの？？ね？」

リアは多少乱れていた銀髪をかきあげ……驚いた。

三人の山賊の奥に、レイスが呆然と立ち去っていた。

無傷だった。

他の三人の山賊は肉がほのかに焦げて倒れているが、レイスは無傷で立っていた。

「…………（あれ？俺、やられてないのか？魔法には

指向性があるのかな？）

「…………（HPは発動して……無いわよね。もしかして

……）」

内心では混乱していた一人だったが、先に話しかけたのはリアだ

つた。

「よ、良かつたわ、無事で何よりよ。怪我とかしてない？ とりあえず、調整して放つたんだけど」

まさか完璧に巻き込むつもりで放ちましたとは言えないリア。そんな事を言つたら何をされるか分かった物じゃない。レイスがそんな事をするわけない、などと知り合つて一回のリアには断言出来るはずもないのだった。

「……ん、そうなのか。えっと、迷惑かけちゃったな。『めん』

よく分かつていらないレイスは、直撃していないと言われ、そうなのかと頭の中の思考に一時停止をかけた。そして、恥ずかしそうに笑みを浮かべながらレイスは言つた。

「リア。俺もその用事、付き合つても良いか？（せめて）アーティストでは教えてくれ！ 宗教を蔑ろにしてこの世界を生きるのは無理があるー。」

リアはその口調に少し驚きつつも、同じように微笑む。

「……うん。私からも、お願ひあるわ」

打算塗れの内心を隠して、レイスはリアと握手した。

## 第三話（後書き）

感想・意見・指摘など、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4127q/>

---

これは罪ですか？

2011年2月17日10時00分発行